
大好きなのは、あんただけ

漆黒のブラックエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きなのは、あんただけ

【Zコード】

Z0471Z

【作者名】

漆黒のブラックエース

【あらすじ】

L-S-DARKさんからのリクエスト小説です
む

(前書き)

サトシの嫉妬です
しかし最後は、甘い筈です。

イッシュ地方から帰るサトシは、飛行船に乗る前にある所に連絡を入れていた。

R R R

「はい。ハナダジムですが・・・ってサトシじゃないビラしたの」
サトシの連絡相手は、恋人のカスミだった。

「どうしたのって、今日の飛行船で帰るって連絡なんだけど」 サトシ
「分かったわ。じゃあマサラの家でママさんと待っているわ」 カスミ

「サンキュー。じゃあマサラでな」 サトシ

「うん」

しかしこれが後に起つるサトシの独占欲の凄さを知る元となるのだから。

マサラタウン（結構時間飛ばしてる）

「良しカスミが待つていてる。行くぜ～ピカチュウ」 サトシ
「ピカチュウ！～ピッカ～」（カスミが！！行こ！）

相棒も『カスミ』と言つ単語に反応。

「ただいま～、ママ～、カスミ～」 サトシ

「ピカチュー」（ただいま）

「お帰りサトシ、ピカチュウ」 カスミ

「ピカチュウ」

カスミを見るやピカチュウは、カスミにダイブする。

しかし何時まで経つても母ハナコが出て来ない。変わりに

「お帰り、サトシ」？

「何でケンジがいるんだよ」

少し不機嫌そうに言つ。

「あたしが、呼んだのよ。実は、ママさんつたら町内会の旅行だか
ら宜しくって言つて行ちやたのよ」 カスミ

「ママが！？」

驚きのサトシ

「そう。それで変わりに僕が呼ばれた訳だ」

「サトシ、お風呂沸かしたけど先に入る？それとも先に食事する？」

カスミ

「勿論。食事が先だぜ」 サトシ

「分かつたわ。すぐ準備するから。ほらケンジ手伝つて」 カスミ

「まだ手伝うの〜」

と言いケンジは、キッチンへ。

残されたサトシは、

「（何だ。）この気持ちは、カスミとケンジが一緒に居るの凄くムカ
つく）」

嫉妬に気付かないサトシ。

暫くして

「出来たわ。」 カスミ

「じゃあ、僕は、帰るから・・・・・（何か黒いオーラがするよう

な・・・）」 ケンジ

「ありがとうね」 カスミ

「じゃあな」 サトシ

ケンジが帰つたのでサトシから出てた黒いオーラが消える。

「サトシ、お帰り」 カスミ

さつきのピカチュウのようにダイブする。

「ああ、ただいま」 サトシ

しつかりカスミを受け止めて抱き締める。

カスミもサトシの首に両腕を巻き付けた。

「ねえ早く」 カスミ

「カスミ、大好きだ」 サトシ

甘い口付けをする。

「さあ、飯食うぞ〜」 サトシ

「フフ」 カスミ

食事中

「でね、ケンジが・・・」

とか

「それでシゲルがね・・・」

とかカスミの口から名前が出て来る。

「（何だ。シゲル達の名前が出て来るとムカつく）」

またサトシに黒いオーラが出て来る。

「もう良いや。俺、風呂入つて来るから」 サトシ

「あ、うん分かったわ。（如何したのかなサトシ）」

サトシは、話を聞くたまぐなり風呂へ。

その様子に気付いたカスミ。

「サトシの部屋で待つてまじょう

カスミは、サトシの部屋へ

一方のサトシ

「くそー何だよカスミの奴、俺よりあいつ等かよ
完全に嫉妬中のサトシ

そして風呂から上がり着替えてリビングへ

「あれ？ カスミの奴何処居るんだ？」

カスミの事を探す。

「とりあえず部屋に戻るか

サトシは、部屋へ。

「はあカスミの奴何処行つたんだよ」

ベットに横に成ろうとすると

「サトシ、あたしサトシに何かしたかな？」

「力、カスミ探したんだからな」

「うん。ねえサトシ答えて」

カスミは、ベットに座り聞く。

「カスミの口からシゲルとかの名前が出て來るのとか俺が帰つて來るまでケンジと2人だったので腹立つた」 サトシ

「もしかしてサトシ、嫉妬してたの？」 カスミ

「わ、悪いかよ」 サトシ

「ううん。嬉しいな。サトシが嫉妬してくれるんだもん」カスミ
それを聞くとサトシは、カスミをベットに押し倒した。

「サトシ、何すんのよ」カスミ

「お前がいけないんだからな。俺に嫉妬とかさせたんだからな」
そう言いつとカスミの脣以外では、無く額や頬、首筋、耳、目蓋、肩
や髪に口付けをして行く。

「カスミ、俺よりケンジ達の方が好きになつたか？旅をしてる俺よ
り」サトシ

「そんな事ない」

カスミは、大きい声で言った

「じゃあ何でお前の話にシゲルとかケンジとかが出て来るんだよ」

サトシ

「実はね、2人には、味見させてたのよ」カスミ

「はい？味見？」サトシ

「そう。だつてサトシには、美味しいの食べて貰いたいもん」カスミ
「本当にそれだけか？」サトシ

「うん。だからね、あたしの好きなのは、サトシだけ、サトシが大
好き」

カスミは、サトシの首に両腕を巻きサトシの脣に口付けをする。

「お願い。サトシ機嫌直して」カスミ

「分かつた。でも俺が帰つて来た時は、そういう話するなよな」サ
トシ

「うん」カスミ

「それにお前の作ったのだつたら全部食べるから味見せんなんよサ
トシ

「うん」カスミ

「後な」サトシ

「サトシ」カスミ

「うん？」サトシ

「大好き」カスミ

「・・・つたく、俺もだよ。カスミ、大好きだぜ」サトシ
今度は、甘い口付けをする2人。

「でもサトシって凄い独占欲よね」カスミ

「悪いかよ」サトシ

「ううん。それだけあたしに一筋だなつて思ったの」カスミ

「当たり前だろ」サトシ

「サトシ、今日一緒に寝よう」カスミ

「へ？」サトシ

「サトシに嫉妬させたお詫び」カスミ

「でも1回だぞ。恥しいんだから」サトシ

「えーあたしは、いつでも良いのに」カスミ

「・・・つたく鍵掛けたら寝るぞ」サトシ

「うん。サトシゴメンね。」カスミ

家に鍵掛けて来る。

「カスミは、俺のだつて印付けるぜ」サトシ
そう言ってカスミの首にキスマーチを付ける

「もうサトシったら。でもサトシだから嬉しいな」カスミ

「そうか。御休みカスミ。大好きだ」サトシ

「うん。御休みサトシ。大好きよ」カスミ

御休みの口付けをして2人は、夢の世界へ引き込まれていった。

(後書き)

大好きなのは、あんただけEND

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0471z/>

大好きなのは、あんただけ

2011年12月1日21時53分発行